

報恩の辞(現代語訳)

明治39年9月、わが立子山村小学校長の朝河先生は、60歳を間近にしたある朝をもってその職をお辞めになり学校を去ることになりました。

先生は、その名を正澄といい、もとは二本松藩の藩士で、たいへん穏やかな性格で、栄利に心を動かされることや、人の誹りや誉め言葉に心が乱されることもなく、つねに何事も誠意を持って行ない、自らを欺かないことを自身のよりどころとしました。

明治七年、天正寺に学校が創立されると、先生をお招きして校長となっていました。それから30年、教えを受けた者は千人を超えました。

先生は寸暇を惜しんで仕事にあたり、子どもたちを教え諭し、その能力を引き出し、折に触れて導いてくださいました。事にあたっては心を開いて教え導き、穏やかな気持ちで子供たちに接し、互いに感じあって誠をもって教育にあたってくださったことで、子どもたちは奮い立ちました。

長き年月を経て、薫陶は厚く、教えを受けた者たちは皆仲良く孝養を尽くし、村中の者たちが先生の教え子となったので、互いに話をする時「先生」といえば朝河先生のことだと誰もが思い、教え子ばかりかその父兄たちまでもが、その名を呼ばずにただ「先生」と称したものです。

思うに人の徳を深めることを人の功の極みだとすることが非難されるならば、どうしてこのようなこと(「先生」といえば朝河先生を指すというようなこと)がおきましようか。

よくよく考えて今どきのほかの教員たちを見れば、口では人の道を説いてはいるけれど、心の中では自らの利益を第一に考え、給料の増額をもって招く者があればそちらに就職します。それゆえに、朝にはこちらの学校に勤めていたかと思えば、夕方には違う学校に遷ってしまう。学校はまるで宿場の仮の宿、弟子と言っても市への道で出会う人々のようです。これでは師弟が親しむことはなく、教導の効果もありません。

後になって弟子が先生に会うことがあっても、共に学んだ学友に抱くのと同等程度の感情を持つくらいでしょうし、はなはだしい場合は、道を行く人と同じように、これまでに会ったことがない、とすら言うことでしょう。徳義はすっかりすたれてしまい人情は薄くなってしまいます。立派に育てようという先生の教えが、それを受ける弟子たちにとって、果してどのような道が残るというのでしょうか。

30年間同じ学校で教壇に立てば、師弟の親愛は深まり、まさに朝河先生のようになることはあきらかでありましょう。

今、先生は職を辞して故郷に帰ることになりました。思いとどまってほしいと願いましたが、その思いはかないませんでした。まるで寒さに震える身から厚い皮衣を奪われるような、生まれたばかりの赤子のような身で頼みとするところを離れ、茫然としてしまい、どうしてよいのかわからなくなりました。

そこで皆で話し合い、遺愛の碑を立てて先生の功績を讃える書を遺すことで我々の思いを慰めるとともに、後の人々に伝えようと思いました。ここで先生がこのことをお聞きになると、きっぱりと断り、許してはくれませんでした。

そこであらためて皆で話し合い、心ばかりの品として金時計を差し上げることとしましたが、それくらいのことでは私たちの気持ちをあらわすことも、先生から受けた恩に報いることもできません。

せめて永く忘れないために、ここにその思いを書き認めて、お贈りすることとします。

稽首再拝いたします。

明治36年9月下旬

(早稲田大学非常勤講師・藤原秀之氏作成)

報恩之辭

明治三十六年九月我立子山村小學校長朝河先生以年近六十一朝辭職而去先生名正澄舊二本松藩士資質坦厚榮利不足動其心毀譽不能亂其情以終始一誠不自欺為歸明治七年創立學校於天正寺延先生為師爾來三十年受教者一千餘人矣先生當職不辭訓蒙養英隨機獎導因事啓沃從容不迫相感以誠教育自此振起年歲之久薰陶之厚孝愛友悌自被一村村中弟子相語稱先生不問而知為朝河先生其父兄亦稱先生不名蓋非入人之德深化人之功至者豈能如此哉情視今之教員者口雖講道而心則唯利是規有增俸邀之者則就焉故朝在某校夕遷某校其視學校如傳舍視弟子以市道由是師弟不親教導無効他日弟子視舊師不異於同席以肩之友甚則若行道之人不曾謀面者德義掃地倫薄成風師之所授弟子之所受果何道哉三十年間從事一校師弟親愛若我朝河先生其人者鮮矣今者先生挂冠歸鄉生等欲留不能猶寒去裏赤子離怙特茫然不知所為也乃相與議將立遺愛碑書其功德以慰我思以俾後人是憲先生聞之峻拒不許於是更議奉呈金殿測時器一儀以表微衷匪報也永矢弗諼遂書以為贈生等稽首再拜

維明治三十六年九月下院

岩代國伊達郡立子山村

(写真提供: 甚野尚志氏)

報恩の辭(現代語訳)

明治三十九年九月、わが立子山村小學校長の朝河先生は、六十歳を間近にしたある朝をもつてその職をお辞めになり学校を去ることになりました。

先生は、その名を正澄といい、もとは二本松藩の藩士で、たいへん穏やかな性格で、榮利に心を動かされることや、人の誹りや誉め言葉に心が乱されることもなく、つねに何事も誠意を持って行ない、自らを欺かないことを自身のよりどころとしました。

明治七年、天正寺に学校が創立されると、先生をお招きして校長となつていただきました。それから三十年、教えを受けた者は千人を超えました。

先生は寸暇を惜しんで仕事にあたり、子どもたちを教え諭し、その能力を引き出し、折に触れて導いてくださいました。事にあたつては心を開いて教え導き、穏やかな気持ちで子供たちに接し、互いに感じあつて誠をもつて教育にあつてくださったことで、子どもたちは奮い立ちました。

長き年月を経て、薰陶は厚く、教えを受けた者たちは皆仲良く孝養を尽くし、村中の者たちが先生の教え子となつたので、互いに話をする時「先生」といえば朝河先生のことだと誰もが思い、教え子ばかりかその父兄たちまでもが、その名を呼ばずにただ「先生」と称したものです。

思うに人の徳を深めることを人の功の極みだとすることが非難されるならば、どうしてこのようなこと(「先生」といえば朝河先生を指すというようなこと)がおきまじょうか。

よくよく考えて今どきのほかの教員たちを見れば、口では人の道を説いてはいるけれど、心の中では自らの利益を第一に考え、給料の増額をもつて招く者があればそちらに就職します。それゆえに、朝にはこちらの学校に勤めていたかと思えば、夕方には違う学校に遷つてしまふ。

学校はまるで宿場の仮の宿、弟子と言つても市への道で出会う人々のようです。これでは師弟が親しむことはなく、教導の効果もありません。

後になつて弟子が先生に会うことがあつても、共に学んだ学友に抱くのと同じ程度の感情を持つくらいでしょうし、はなはだしい場合は、道を行く人と同じように、これまで出会つたことがない、とすら言うことでしょう。

徳義はすっかりすたれてしまひ人情は薄くなつてしまひます。立派に育てようという先生の教えが、それを受ける弟子たちにとつて、果してどのような道が残るといふのでしよう。

三十年間同じ学校で教壇に立てば、師弟の親愛は深まり、まさに朝河先生のようになることはあきらかでありまじょう。

今、先生は職を辞して故郷に帰ることになりました。思いとどまつてほしいと願ひましたが、その思いはかたやしませんでした。まるで寒さに震える身から厚い皮衣を奪われるような、生まれたばかりの赤子のような身で頼みとするところを離れ、茫然としてしまひ、どうしてよいのかわからなくなりました。

そこで皆で話し合い、遺愛の碑を立てて先生の功績を讃える書を遺すことで我々の思いを慰めるとともに、後の人々に伝えようとなりました。ここで先生がこのことをお聞きになると、きつぱりと断り、許してはくれませんでした。

そこであらためて皆で話し合い、心ばかりの品として金時計を差し上げることとしましたが、それくらいのことでは私たちの気持ちをあらわすことも、先生から受けた恩に報いることもできません。

せめて永く忘れないために、ここにその思いを書き認めて、お贈りすることとします。

稽首再拝いたします。

明治三十六年九月下旬

(早稲田大学非常勤講師・藤原秀之氏作成)